

ノースカロライナの教育改革の現場を見て

ーグローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクトに参加してー

高槻市立第一中学校 教諭 守 きみよ

1. はじめに

私たちウィルミントン地区に配属されたメンバーは、小学校3名、中学校2名、高校2名の現職教諭で、大阪教育大学の森田先生の指導のもと、それぞれVirginia Williamson Elementary School, Topsail Middle School, Hoggard High School (後半、Laney High) に分かれてそれぞれ研修した。

私はそのアメリカのノースカロライナでみた教育の現状を、日本の教育改革、発展に役立てる視点でまとめてみた。

厳密にいうと日米の比較とはいえないが、便宜的に日米の比較としてのべていきたい。私の訪問した学校は主に Topsail Middle Schoolである。

2. ノースカロライナの教育改革から学んだこと

ノースカロライナの教育改革はABC改革とよばれ、

- 1 Accountability (説明責任)
- 2 Basic (基礎基本重視)
- 3 Local Control (地域独自、地域性重視)

の3点がこの改革の根幹である。

わたしたちは4つの側面から比較してみた。

1. スタッフ
2. カリキュラム
3. メディアリテラシー
4. 地域との連携

1) 学校教育に携わる、様々なスタッフ

校長の強い指導力に基づき、様々な立場の専門職のスタッフがチームとなって学校教育を行っていることを強く感じた。(トップセイル中学校のスタッフは下のとおり) 下の主なスタッフを参照してもらえばわかるように、それぞれのスタッフの職域と責任が明確になっている。日本のように担任や生活指導担当がいくつもの役割を兼ねることはない。

〈主なスタッフ〉

校長

副校長(教頭)

副校長の実習生

(6ヶ月ほど実際の実務を研修する)

教諭はすべて2教科の免許をもっている

(Basic重視であるため数学、国語は必修なのだろう)

情報教育専任

障害児教育主担

スクールカウンセラー

ソーシャルワーカー

図書館の司書

事務所のスタッフ

2) 基礎、基本の重視した、高い教育水準、個をのばし、個に応じたカリキュラム

〈小学校〉では

基礎基本はコミュニケーション力であり、国語の読解力を基本教科にしている。

〈中学校〉では

国語、数学、社会、理科をコア教科(基本教科、必修教科)とし、2人の先生がチームを組んで教える。その中でも国語の読解力、表現力、数学についてはEST(州統一試験)が年度末にあり、その試験に全員を合格(70%得点)させることをめざしている。合格しないと進級できない。(教科ごとの進級もあり)その成功は教師の報酬、学校の評価にも関わる。

ちなみに2001年5月に届いたSherry校長のメールによると1人をのぞいて全校生徒全員合格したそうである。

〈学校以外のAlternative School〉

学校以外のAlternative Schoolといって通学制の日本の修徳学園(大阪府立児童自立支援施設)のような施設がある。

日本と違って問題行動以外に学力不振、多動性で、集中力がなく、集団での授業の妨害になる生徒もリスクチューデントとして扱い、普通の授業が受けられるように訓練する郡立の学校である。規則は厳しく、休み時間や教室移動の時間も教師の目が行き届いている。特に優れた教科は高校の勉強をマンツーマンでうけている生徒もいて、社会性人間性を育てる個に応じ

た手厚い教育をうけている印象であった。

心理学、精神医学の専門家などスタッフがそろい、学校の中の取り組みでは普通の学校がカバーできない生徒を普通の授業に戻せるように学校の外で支援しているのである。

日本では授業中の私語やADHDのような多動性、集中できない生徒による中断や、その連鎖反応による授業の困難な状態にも授業を担当する教師の力量だけに任せられており、学校の授業をうける教育権の問題もあり実際には適切な処置がなされぬままになっている場合も多い。日本の抱え込んで責任を果たせない学校の現状からすると、学校の外にこういった施設、および、学力不振や授業妨害も他の問題行動と同じく普通の授業をうけるための特別の教育や訓練が必要な生徒という認識が求められる。逆に普通の学校では学力不振者を作らない責任が当然生じていく。

いろいろな場で「区別し評価し、その個に応じた対処をする」のが、合理的な教育のやり方なのであろう。

3) 情報機器の使用

情報機器はうちの学校のようにコンピューター室にだけあるのではなく、学校中どこにでもあり、自由に使えるようになっている。廊下にもコーナーがあり、生徒が宿題をやったりしている。

テストに合格していない生徒の補習が授業中にあり、各自コンピューターのところに来て自分のプログラムをやっている。

Reading Renaissance(読書のプログラム)やRiverdeep(各教科)のような教材のプログラムをどんどん使い、ハンドアウトもそのまま使う。教材づくりにそそぐ労力を習熟させる方にそそぐのがかれらのやり方である。

メディア教育に欠かせない、機器の管理、メンテナンス、フリーソフトの充実など専任のスタッフがいることがうらやましい。

教育委員会に付属した教育センターにすれば教材に使えるソフトや本が簡単に検索でき、各校で無料ダウンロードでき、ハンドアウトも使えるのは今後日本でも検討を要する。

4) 学校、保護者、地域の連携

It takes a village to raise a child.

(子どもを育てるのは地域の村である)

学校は生徒の指導に関して主導権をもち、生徒指導に関しても校則とその罰則については入学時に説明さ

れていて、その用紙に担任がサインすればいいようになっている。それが誰に対しても公平だという。

教室にもDress CodeやClassroom Rulesがはってあり、何種類もの Detention (おしおき) がある。昼食時、みな友達と楽しそうに食べているのに、先生たちのテーブルの横で黙って黙々と食事している生徒たちがいた。Lunch Detentionだという。

公立の中学校は黒人と白人の割合が四分六から半半に近いこの地区では経済的に大変な家庭も多い。経済的に厳しくトレーラーハウスといって移動式の住宅に住み、教育に対する関心も薄い家庭の生徒も多い。

学校の事務所のスタッフやスクールカウンセラーなどが、個別に支援しているそうだ。生徒指導の事例など個別にみなおしながらもコード(基準)をシンプルに、マニュアル化していくことが必要である。

職業の授業などでは地元の専門職が先生として、学校でログハウスを建てたり、乗馬のしかたや用具の手入れのしかた、植木や野菜の育て方などを教えていた。

情緒障害児もこの課外授業に参加し、訓練にも役だっている。

また生徒の保護者が授業の補助に入ったり、体育館で授業を参観しながら、授業で使う教具やイベントのグッズなどをつくっている保護者の集団などがあつた。

日本でも総合学習、選択教科などで、地域の専門家に人材バンクに登録してもらって先生として生徒に直接指導してもらう機会もふえた。私の子どもの頃、それはごく当たり前のこととして行われていた。学芸会に演劇をやっているお父さんが来て教えてくれたり、鼓笛隊の指導には地元の吹奏楽団の人が来てくれたこともあつた。

日本でもより専門的に校区の人材を学校現場で直接利用することもふえるだろう。

教室にはってあつた標語につきのようなものがある。

TV is gooder than reading.

Do not reinvent the wheel.

Do it yourself is important.

Everyone is equal under the code.

教育改革のエッセンスが浸透している気がした。

3. このプロジェクトの共同研究のまとめとして
州をあげて教育水準の高さを維持するため、ESL(州

の統一試験)を行い、訪問した学校がそのESLで毎年いい成績をおさめているようで自信と誇りからくる活気があった。

先生は生徒と距離をおき、厳しい態度で接し、生徒同士がもめたり、じゃれたりしているところはあまり見かけなかった。授業はグループ討議もずいぶん取り入れて、発表も積極的で集中度も高いようであった。田舎でテンポがゆっくりしているのでそれほどストレスを感じるほど、テストテストというほどでもないらしい。

日本が総合学習、ベーシック重視を取り入れるなら、

〈資料〉

ノースカロライナの州の標準カリキュラム

カリキュラム領域	学 年
美 術	K - 12
コンピューター・技術	K - 12
国 語	K - 12
学生指導(ガイダンス)	K - 12
健康教育	K - 12
情報スキル	K - 12
数 学	K - 12
第2外国語	K - 12
理 科	K - 12
社 会	K - 12
職業教育	6 - 12

それを実現できるための条件整備が必要なことが、学んだ4項目のどれにもあてはまった。

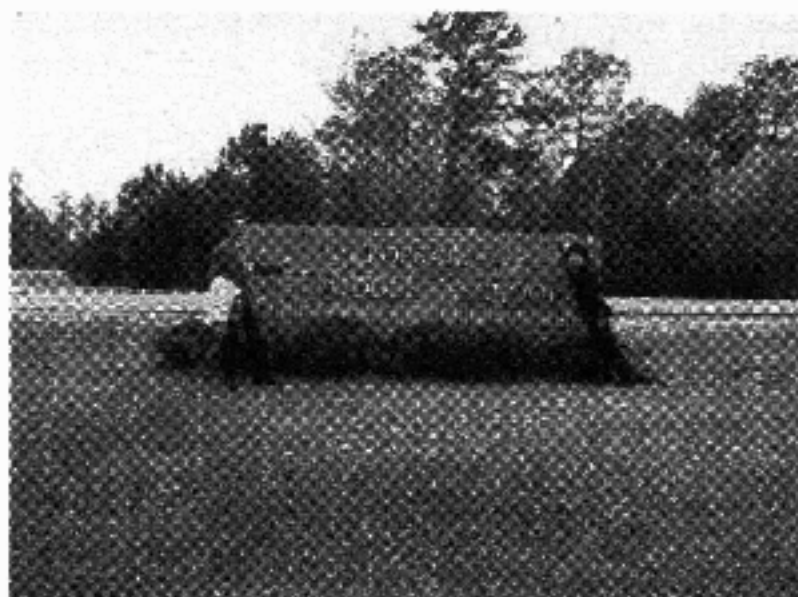
各教師が2教科の免許をもち、チームを組んで教えられること、様々な専門的な立場のスタッフによる指導、きちんとした個を明らかにする評価と個に対処したカリキュラム、様々な原因による学力不振や不適応行動をする生徒への学校外の代替学校の支援など。

情報教育においても、教材に即利用できるサイトのリンク集など、教師がだれでも使えるものの充実、外見の模倣ではなく、日本でコンセンサスを得られるやりかたで改革をすすめることが急務である。

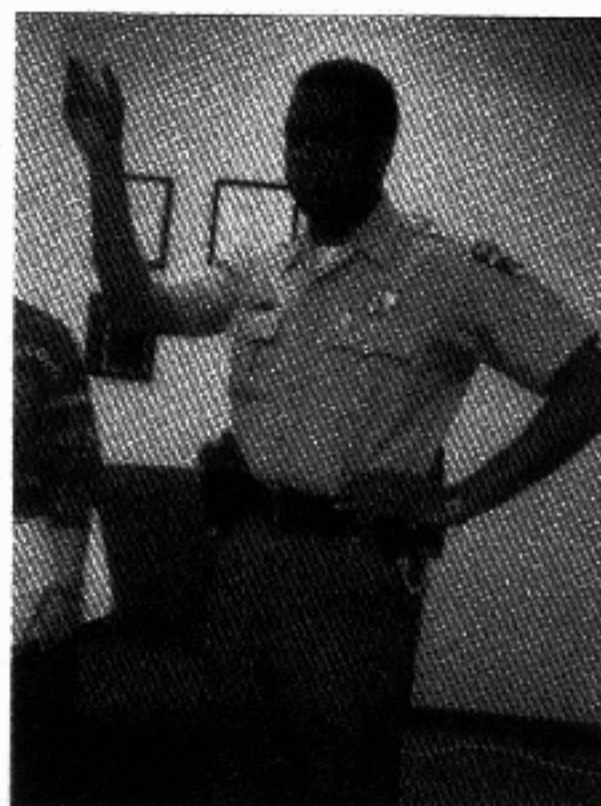
標準カリキュラム外のコース

カリキュラム領域	学 年
ラテン語	9 - 12
英語特待生の標準コースへのガイド	K - 5

日 時	場 所	内 容	関係者／関係機関
3 / 24	コロナホテル	事前研修&宿泊	
3 / 25	関空発	ウィルミントン着後 ホテル泊	
3 / 26	Topsail Middle School	校長室で学校の概要を聞く 各先生方やその他の職員の紹介 学校見学 読書タイム (Reading Renaissance) 選択授業 職業教育	校長先生 教務主任
3 / 27	Topsail Middle School PeaceMaker Program	授業参観 校外活動を見学 (問題解決プログラムに有志の生徒が参加)	スクールカウンセラーの 先生と共に
3 / 28	Topsail Middle School 午後	授業参観 6年生の先生チームと総合学習について懇談	
3 / 29	Topsail Middle School	授業参観 授業をやらせてもらう ジャパンプラブの生徒との交流	
3 / 30	Willston Middle School Horry Tree Elementary School	学校訪問 教育委員会と昼食	
3 / 31	市内の見学	先生宅にホームステイ	
4 / 1	大学の Walker 先生の授業 に参加	ローリーへの移動、ホテルでプレゼン の準備	
4 / 2	University of Wilmington	サマリーミーティング(合同発表会)	大学教授、支援団体長、 3地区の交流学校の先 生、日本の訪問団
4 / 3		州議会の会場見学 教育施設の見学 教育委員会	
4 / 4	ローリー発 帰国へ		
4 / 5	関空着		



門などどこにもない



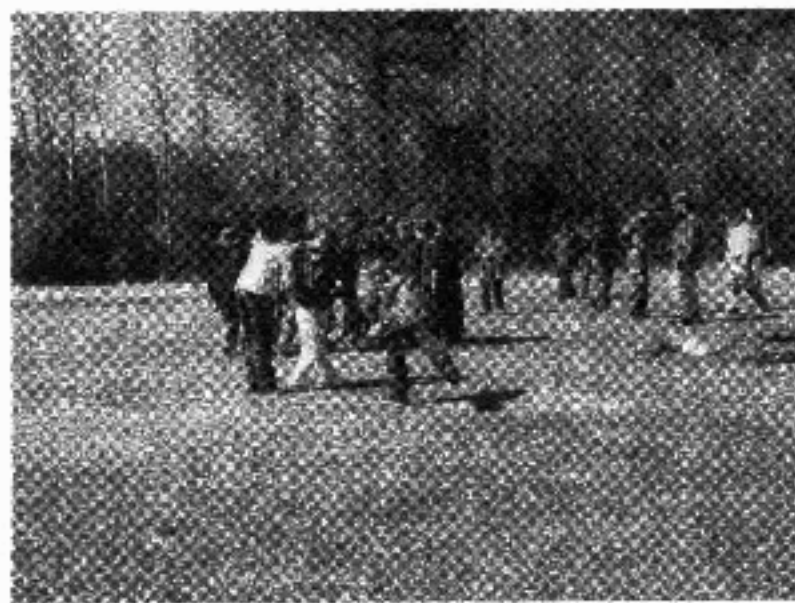
学校常駐のおまわりさん



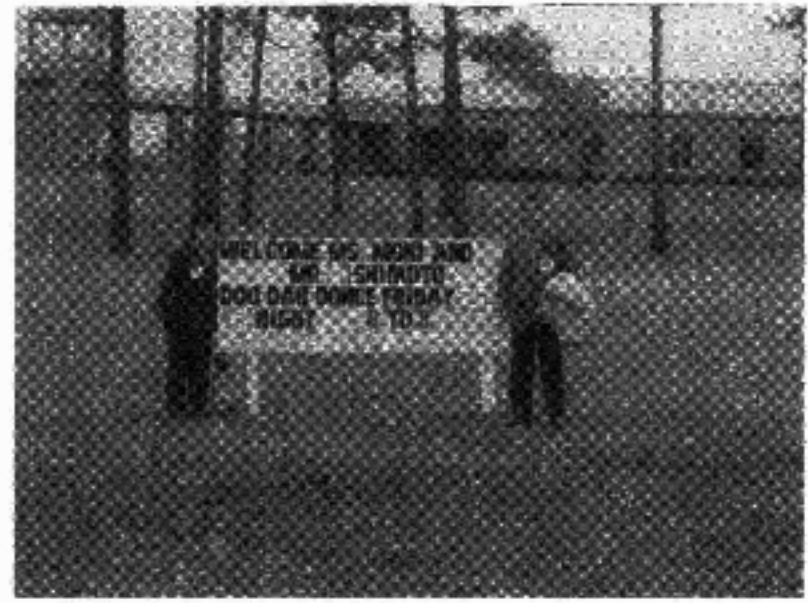
トレーラーハウスから通う生徒も多い



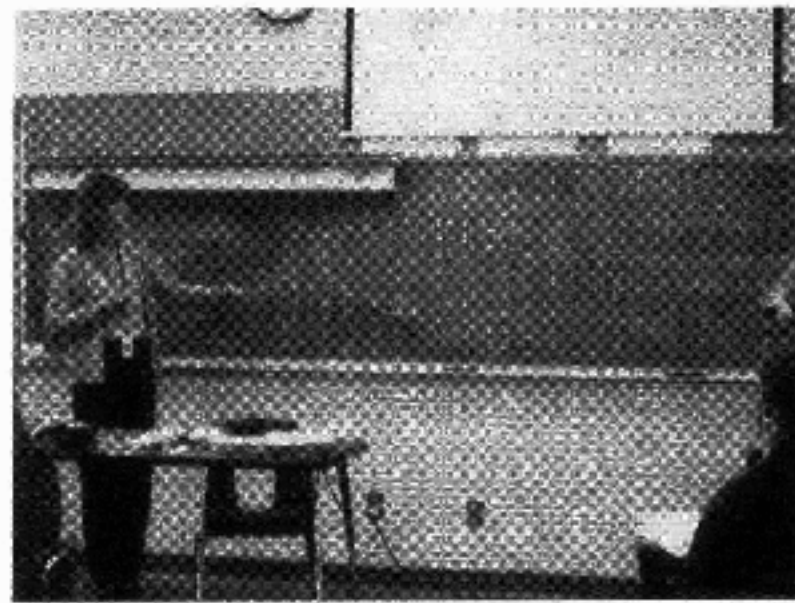
Peacemaker Programのひとつ



Peacemaker Program



校舎の前



Lauguage Arts 五行詩の授業
百人一首を紹介させてもらった

グローバル・パートナーシップの展開 —バージニア・ウィリアムソン小学校の訪問を通して—

富田林市立新堂小学校 教諭 幸道典子

3月26日

会議室が私たちの待機場所になりました。事務の方が毎朝飲み物やフルーツを用意してくれました。驚いた事は、会議室や教師の休憩室（職員室はないようでした。）に、自動販売機がありました。

全校児童が集まることは年に数回しかないそうですが、私たちの紹介を兼ねた歓迎のセレモニーを体育館で開いてくれました。会場の後ろには、PTAが座っていました。自己紹介のあと、3年生が手話つきの「It's a small world.」ともう一曲を歌ってくれました。そのあと、全員で「さくらさくら」を歌ってくれました。「さくらさくら」は、5年生の音楽の教科書に載っているそうです。会場の真ん中には耳の不自由な子が座っていて、手話通訳の教師がついていました。

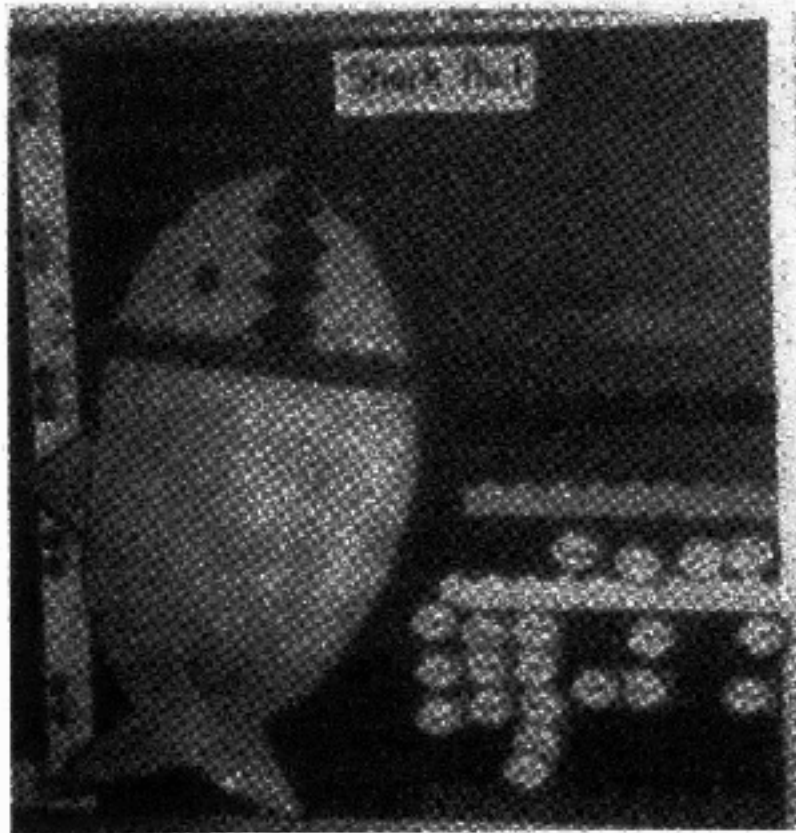
その後、校内を案内してもらいました。まだ建てて2年目ということもあり、校舎は新しく、きれいでした。広々とした敷地に建てられていて、二階はありません。外から見ると、工場のように見えました。清掃は、すべて清掃スタッフがしていました。日本ではスーパーマーケットなどで見かける、あの大きな清掃マシンを使っていました。校舎の周りに生えている芝生は、用務員らしき人が大きな芝刈り機に乗って刈っていました。

教室は廊下をはさんで並んでいました。廊下に窓はなく、壁には児童の作品が掲示されていました。小学校には、幼稚園児から五年生までの教室がありました。教室には、担任とアシスタントティーチャーがいて、教室は子どもの部屋というよりは、その担任の部屋という意味合いが強いようでした。教えてもらう先生の教室へ子どもたちが移動していました。アシスタントティーチャーは、音楽や図工などで教室がかわるときもいっしょについていき、授業を手伝っていました。宿題の用意や確認、子どもの作品掲示などはアシスタントティーチャーの仕事で、作品はだいたい廊下にはってありました。扉がはられているコーナーもありました。扉には絵が描かれているものが多かったのですが、中には、家族の写真が何枚もはられているものや、綿



やアルミで作ったボールのようなものが貼り付けてあるものもありました。教室内の掲示はほとんどが教具で、Teacher's Aidなど教師用の教材屋で購入すると聞きました。共同購入物は学校から費用が出るようですが、それ以外は担任が個人的に購入すると聞きました。アルファベットや数字が黒板の上や空いているスペースにはってありました。とてもカラフルで、入口のドアにも装飾してある教室がほとんどでした。学校には、星型やロケット型が簡単に作れる型抜き機械があるようで、同じパターンの掲示物をたくさん作りたい時に便利だと思いました。「よい児童とは」というような掲示物もあり、その下に「話をよく聞く」や「他人を敬う」「積極的な姿勢を見せる」などが書かれていました。あと、Thinking Mapという、考えをまとめたり広げたりするのに使う、図形のシートがどの教室にもはられていました。ノースカロライナ州では、Thinking Mapを教える事が義務付けられているそうです（写真参照）。

子どもは各教室に約20名いました。服装はジーンズにTシャツが圧倒的に多く、クラスに一、二人がスカートの子でした。かばんは様々で、リュックサック、ショルダーバッグ、コロ付きのかばんでした。教室の移動があるため、子どもたちは大きいかばんを持っていました。机の並び方は、各クラスによってコの字型だったり、グループごとだったり、担任の考えによってちがいました。教科書はとても分厚く、重いので、学校に置いておくそうです。宿題はほぼプリントで出ていました。授業中、ほとんど私語がなく、静かに教師の話聞いていました。うわさには聞いていましたが、



クラス全員の名前のカードが黒板の下の方に貼ってあり、注意を受けるとラインの上にどんどん上がっていく表のようなものが、どのクラスにもありました。最初は緑のライン、次に黄色、赤色、青色、紫色というふうに上がっていくようです(写真参照)。休憩の時間が減る、お昼ご飯の席を離される、親へ連絡、校長、カウンセラーからの指導、教室を出されるなど、注意された内容や頻度によって対応が違ってくるようです。高学力、低学力の子に対して抽出学習もしていました。時間によっては、二学年ぐらいを合同にして、学力別のクラスを組んで授業をしていました。

教室移動の時は、担任を先頭に一列に並んで廊下を歩いていました。一番後ろにはアシスタントティーチャーがついていて、少しでも話し声が聞こえると、注意をしていました。授業と授業の間に休み時間はなく、教室移動の途中にトイレに寄っていました。トイレへも、クラスで並んで行き、入りたい子だけが入り、他の子は廊下で並んで待っていました。授業中どうしても行きたくなった時は、教師が許可したことを証明するものを持って、教室の外へ出ていました。トイレには、ペーパータオルがついていました。清掃スタッ



フが掃除をしているので、とてもきれいです。

昼食はカフェテリアで、家から持ってきたものを食べたり、カフェテリアの食べ物をトレーにとって食べるというスタイルでした。家から持ってきている子は少ないようでした。ガムやポテトチップスも置いてありました。学年ごとに時間が決まっているので、時間がくるとまた一列に並んで、他の子が片付けるのを待っていました。クラスごとに固まって座り、アシスタントティーチャーは人数の少ないところか、近くに座って食べていました。私たちがカフェテリアにいと、いつも「いっしょに食べよう」と子どもたちが声をかけてくれました。

昼休みは5分間外の遊具で遊ぶ事ができ、子どもたちはとても楽しみにしていました。一列に並んで遊具の場所へ行き、アシスタントティーチャーは子どもが怪我をしないようにそばについて見ていました。遊具はうんてい、のぼり棒、鉄棒、網などが組み合わさった大きいもので、どの角も丸くなっていました。遊具の下には木のチップが敷き詰められていました。子どもが怪我をすると、学校の管理責任を親から厳しく問われると、アシスタントティーチャーが話していました。看護婦は近くの学校と兼任なので、緊急の救護法を数人の教師が習得しているそうです。

登下校は、親の送り迎えか、スクールバスなので、全学年が2時45分に帰ります。下校の放送が流れると、何をしてもすぐにやめて帰る準備をして、廊下一列に並んでいました。そのため、幼稚園のクラスでは、午後は外で遊ぶ時間にして、帰る時間を他の学年と合わせていました。

両親が働いている子どもなどには、学童保育のようなものがあり、彼らは州や郡から派遣された職員と、遅くて午後の7時ぐらいまで学校に残れます。中には、この学校の教師の子どももいると聞いて、驚きました。カフェテリアが活動場所です。

3月27日

一時間目は、全クラスがDirect Instruction Study?の時間で、二学年合同の少人数制の学習をしていました。ReadingとComprehensionが3クラスずつあり、学力によってクラスを分け、苦手なところの強化学習をしていました。

この学校では、土日がお休みで、毎日Resourceとい

う時間を一時間確保していました。Resourceというのは、週に一時間のMusic, Computer, Art, Library or Guidance, Physical Educationの総称です。日本でいう専科の形をとっていて、音楽の教師は全学年の音楽を受け持っていました。近くの中学や高校の指導もしていると聞きました。体育の授業は、体育館の中だけで行い、ランニングが中心だそうです。私が見た時は、柔らかいボールを壁に向かって投げていました。

この日は、音楽の授業を中心に見ました。音楽室にはアップライトのピアノが一台あり、テレビの前にカーペットが敷かれていました。楽器はすべてロッカーか楽器庫の棚にしまわれていました。他のクラスは自由に座っていましたが、3年生は私語が多いようで、男女交互に並んでから座るように指示していました。

この時期は、器楽を全学年に教えていました。ビデオを見て学習していました。ビデオのあとは、楽器の絵本を使いながら、それぞれの楽器について、もう少し詳しい説明をしているようでした。幼稚園のクラスでは、体を動かしながら歌を3曲歌い、その後ビデオを見ていました。4年生のクラスでは、ビデオを前時の続きから見ていました。どの学年にも同じビデオを使っていましたが、低学年には楽器に親しませる事をねらって、高学年には少し専門的な楽器の説明や演奏の形態についても話をしていました。幼稚園のクラスは、音楽室から帰る時に、がんばったご褒美として、手のひらにはんこを押してもらっていました。

その後、メディアセンターに行きました。学校の入口に入って真正面にあるメディアセンターは、日本でいう図書室にあたる部屋でした。市立図書館のように、センサーで読み取って貸し出しや返却の手続きをしていました。コンピューターが職員用に3台、誰でも使えるものが2台あり、どのコンピューターからでも子

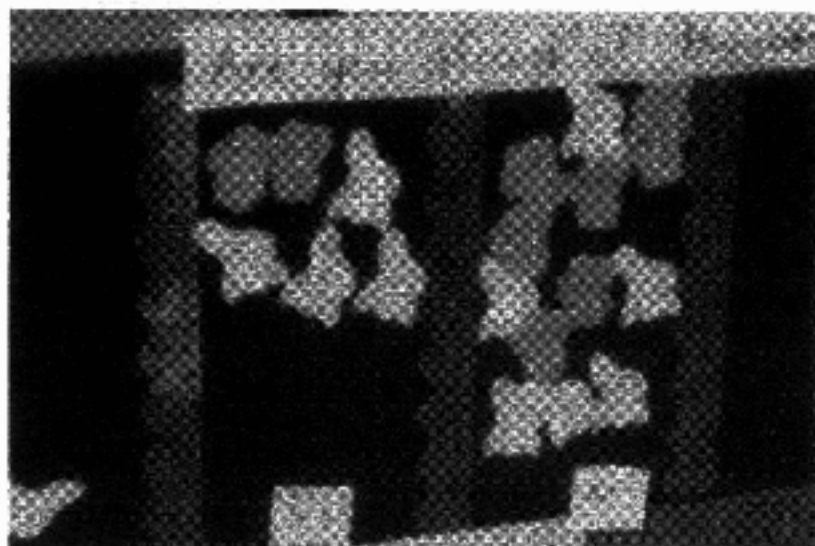


どもたちがどんな本を借りているかがわかるそうです。本を読んで、コンピューターに入っているクイズに正解すると級があがっていき、表彰されるというシステムで、子どもたちに多くの本を読ませようとしていました。子どもたちはコンピューターを使って自由にクイズに挑戦できるそうです。メディアセンターの壁には、表彰された子どもの写真が貼られていました。また、借りた本を全員返したクラスには、賞状を送っていて、教室の壁に貼られていました。メディアセンターの中に放送設備があり、全クラスにビデオや放送が流せるそうです。

3月28日

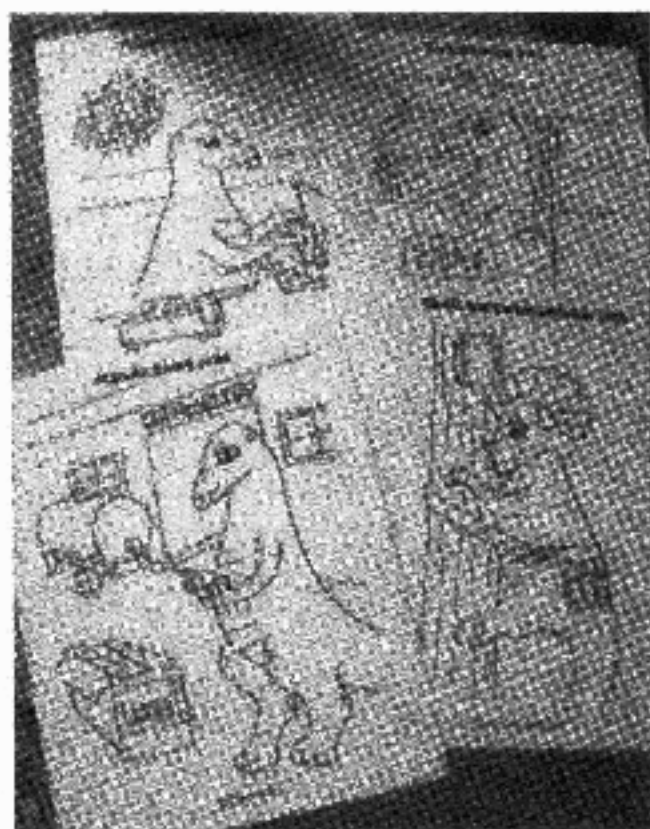
幼稚園のクラスを見学しました。すぐに、図工室に移動しました。私たちが来ているということで、「花」の漢字がくりぬかれている紙と花形のパターンをいくつか描き、色付けした紙を合わせるという作品を作っていました。音楽と同様、専科の教師が同じテーマで全学年を教えているようでした。ただ、それぞれの学年に合わせて材料を変えたり、子どもが作業するところを増やしたりすると聞きました。見せてもらった鳥の作品は、1年生では絵の具で色をつける、4年生では鳥の形をくりぬいて、うらから格子模様にした色画用紙を貼り付けるという風に活動内容をかえていました。教師が手順を説明したあと、めいめいが作業をはじめますが、とても静かに色塗りをしていました。「これでいい?」とか「見て!」と自分の席から教師に見せる子どもはいましたが、騒がしくなる事はありませんでした。少し集中が切れると、教師とアシスタントティーチャーが「シー」と言って静けさを保っていました。作業中に琴などの和楽器の演奏をCDで流すなど、雰囲気作りにも工夫しているようでした。

その後、教室に戻りました。カーペットが敷かれて



いるところに座りながら、アルファベットのカードを並べていたり、丸テーブルに4、5名ずつ座って色塗りをしたりしていました。となりのクラスとの間にトイレがあり、どちらのクラスからも行けるようになっていました。幼稚園児にも宿題があり、保護者に宿題の内容を説明するプリントを付けて渡していました。教室掲示の中に、「Are you afraid of thunder?」と書かれている紙があり、YesとNoのところに子どもたちの名前が貼り付けられていました。小さい頃から、自分の考えを述べる事が大切にされているように感じました。連絡帳の役割を果たす連絡ファイルには、その日のその子の授業態度を示す表があり、がんばっていた日には黄緑のシール、注意散漫な日には青色のシールが貼られていました。保護者に子どもの様子を知らせるためにしているそうです。日本に比べてほとんど休み時間がなく、午前中に5分間のスナックタイムがあり、音楽を聴きながら席でクッキーを食べていました。教室には、流し台の付いた小さいキッチンがあって、子どもたちはそこで手を洗っていました。

道徳の授業が見たいとお願いすると、Character Educationの授業をしている5年生のクラスを見せてもらえました。これも専科の教師が全学年を教えていました。今は職業について学習していました。動物園の飼育係が仕事をしているビデオを見ていました。これも全学年に同じビデオを見せているそうです。他にも、消防士やパイロット、警察などのビデオが学校にあり、子どもが希望すれば家に持ち帰る事も出来るそうです。その後、仕事をする人と仕事内容を結びつけ



る内容のプリントをしながら、それぞれの職業について理解を深めているようでした。ワークシートやプリントは、低学年と高学年では違うものを使っていました。低学年は、恐竜がタクシードライバーをしている絵に色を縫ったり、自分が家で出来る仕事に丸をつけたりしていました。別の時間に質問したのですが、2年生の子どもに将来何になりたいかを聞くと、弁護士、獣医、パイロット、トラックの運転手、土木作業員、法律家とさまざまでした。カフェテリアで同じ質問を4年生にすると、野球選手、軍人という答えが返ってきました。Character Educationの教師に聞くと、野球選手よりは軍人の方が、就職できる可能性が高いから、どちらかという軍人を勧めると話していました。

3月29日

桃太郎を学習しているということで、毛利先生が紙芝居を読む事になり、見に行きました。子どもたちは、袴や扇子に興味深そうに見ていました。日本語で身振りを入れながら、迫力のある読み聞かせをしておられ、子どもたちは最後まで目がはなせない様子で聞き入っていました。

そのあと、絵本の読み聞かせを2冊させてもらいました。五味太郎の「ぼぼぼぼ」と「きいろいのはちょうちょ」を読みました。一冊目は、汽車の「ぼぼぼぼ」という音がいろいろと変化していく本です。英語では汽車の音は「チュチュチュ」だけだと聞いていたので、一緒に声に出して読んでくれるか不安でしたが、驚いたり、不思議そうにしながらも、声を出してくれました。2冊目は、しかけ絵本で、ちょうちょだと思ってつかまえようとする、花だったりヘルメットだったりする本です。日本の子どもたちに読んだ時と似た反応で、登場人物の男の子に「ちょうちょじゃないよ!」と呼びかける子もいて、みんなで予想しながら読み進めていきました。

読み終わった後、自然と子どもたちから手が挙がって、日本の学校についてのたくさんの質問を受けました。

校長先生に質問をする時間を取ってもらいました。校長や副校長は学校経営の仕事が主で、教員の免許や教職経験は必要ないようです。

午後からは、幼稚園の子どもたちにも絵本を読む事になりました。私の読み聞かせが終わった後、今度は

お礼に子どもたちが絵本の読み聞かせをしてくれました。読みたい子が手を挙げ、担任の先生に当てられた子がみんなの前に座って2、3ページ読んでくれました。1ページ読み終わるごとに本の絵をみんなに見せ、聞いているみんなから拍手をもらっていました。

この日は、14:00ごろから保護者が参観にくるParent's Dayで、全校生徒と保護者が体育館に集まって、1年生のスイミーの音楽劇を見ました。その後、校長先生からお別れの話があり、バージニア・ウィリアムソン小学校の訪問を終えました。

日米の小学校における音楽教育の実際と課題

—バージニア・ウィリアムソン小学校の授業を参観して—

富田林市立新堂小学校 教諭 幸道典子

(1) はじめに

私の勤務校では、昨年度から2002年度新教育課程への移行措置として、高学年の音楽の授業が年間70時間から53時間（週2時間から1.5時間）に削減した。そのため、活動の時間が十分に取れないという理由から、教材を入れかえたり、短時間でも可能なように手を加えたりして指導するなど、子どもの実態に合わせて工夫して指導している。

今回、ノースカロライナ州の教育の実際に触れるという貴重な経験を生かし、今後の日本の教育について考えていく参考にしたい。授業を参観する、音楽担当の教師から話を聞くことを中心に、アメリカの音楽教育について、理解を深めたいと考える。

(2) 研究の概要

① 歌唱指導について

初めて学習する歌を子どもたちに出会わせる時に、子どもがその曲に興味を持ちやすくするために話をしたり、何かを見せたりする。逆に、子どもが興味を持っているものに関連したテーマの曲を選ぶ事もある。アメリカでは、どのようにして歌を学習するのか、特に導入の時に何か気をつけてしている事があれば参観し

たい。

日本では、頭声的発声で歌うことが望ましいといわれているが、アメリカではどのような発声指導が行われているのか。また、日本では、中学年ぐらいから2部合唱の指導をするが、合唱指導についてもどのように行われているか知りたい。

② 器楽指導について

日本では、学校によって多少違いはあるようだが、1、2年生ではハーモニカか鍵盤ハーモニカ、3年生以上はソプラノリコーダー、中学生以上はアルトリコーダーを指導している学校が多い。アメリカでは、何か特定の楽器を使って器楽指導をしているか。また、クラスや学年ごとで合奏をする事があるか。どんな楽器が学校においてあるかを調べたい。

③ 評価について

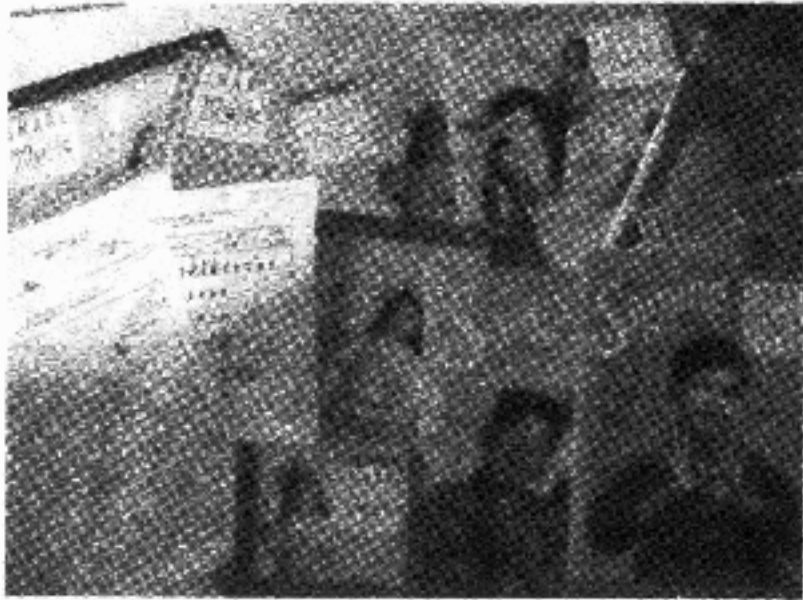
私の学校の通知表では、学年、学期ごとに学習指導要領に沿ったねらいを定め、音楽の評価は、歌、楽器演奏、鑑賞の3項目に分けて評価している。授業中での取り組む姿勢、実技試験、感じたこと、考えた事の発表や記述などから、子どもたちの音楽活動を評価している。アメリカでは、どのような評価項目を設定し、どのような形で評価しているか、探っていきたい。

④ 現地調査の日程

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関
3/27 (火) 10:10 1:25 2:00 3:00	音楽室	4年生の授業を参観した。 幼稚園の授業を参観した。 3年生の授業を参観した。 放課後、質問する時間をいただいた。	Mr. Mathews Virginia Williamson Elementary School 1020 Zion Hill Road Bolivia, N. C. 28422
3/28 (水) 3:30	メディアセンター	職員会議後、質問をする時間をいただいた。	

残念な事に、音楽担当の教師は、他校と兼任されているので、週に1、2日しか学校にいないということだった。しかも、(方法やねらいは学年によって多少違うようだが、) 全学年に同じ内容を指導していたため、

今回は器楽指導の授業しか参観できなかった。ただ、音楽の先生がとても協力的で、私の質問に親切に答え、書きながら説明をしてくれた。当時1年生の担任をしていた事を話すと、1年生用の教師の指導セットを一



式くださった。教科書、指導書はもちろん、CD、OHPシート、歌集、学期のイラスト集、手話付き歌集などが入っていた。

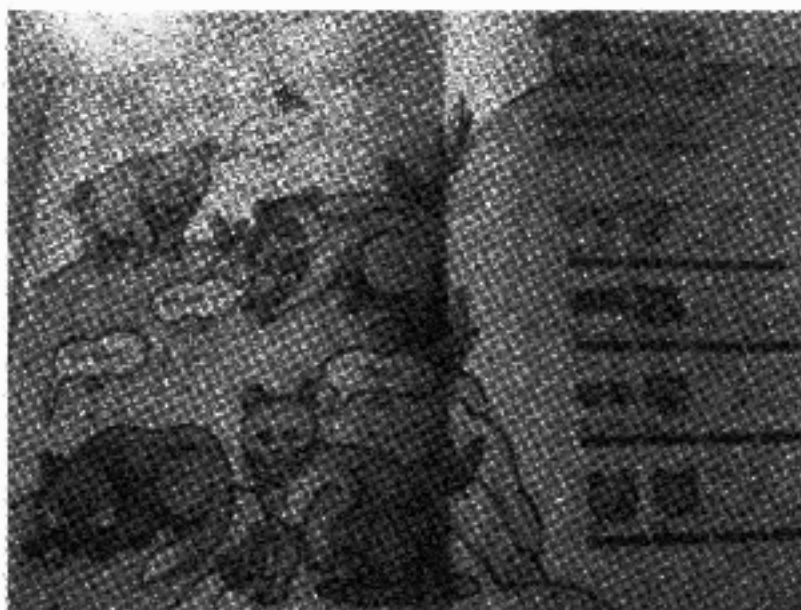
(3) 研究の結果と考察

① 歌唱指導について

残念ながら、全学年に器楽指導をしている時期だったので、歌唱指導は、幼稚園の子どもたちが授業のはじめに既習曲を歌いながら踊っているところしか参観できなかった。日本の子どもたちと同様に、踊りに夢中になると、歌うのを忘れてしまっていたが、とても楽しそうに動いていた。

歓迎セレモニーの時、3年生が「It's a small world.」を手話付きで歌ってくれたのも、日本でも最近よく見られる光景なので、よく似ている印象を受けた。

5年生の教科書に「さくらさくら」がのっていて、春に授業で歌ったそう。歓迎セレモニーの時は、全校で歌ってくれた。アメリカで日本の歌が歌われているとは思っていなかった。後で調べてみると、1年生の教科書にkobuta (こぶたぬきつねこ) と Kaeru no Uta Frog's song (かえるのうた) がのっていた。Kobutaの方は、ローマ字で歌詞がかかれていますので、日本語



で歌えるようになっていた。Karu no Utaは平仮名で日本語の歌詞がかかれています、下に英語の歌詞がつけられていた。1年生から日本の歌を紹介しているということに驚いたが、日本でも、「こぶたぬきつねこ」は1年生、「かえるのうた」は2年生の教科書にのっている曲なので、発達段階にあわせて一致したのだろうか、興味深く感じた。日本で2年生の教科書にのっている「ピンゴ」という曲は、アメリカでは1年生の教科書にのっていた。

歌を教える過程を質問した。ふつう、i) 曲の鑑賞をする、ii) 教科書などを見ながら歌う、iii) 先生が歌った後を追いかけて歌う、iv) 黒板に歌詞を書き、ポイントになる言葉だけを残し、他を消していきながら覚えるなどの方法で10～15回くりかえす事によって習得していくと話していた。導入の仕方について、何か工夫している事などがあれば聞いてみたかったのだが、私の質問の意図がうまく伝わらなかった。

教科書には、音楽に関心をもたせようとする様々な学習活動が載っていた。1年生の子ども用の教科書には、五線譜でかかれています曲は17曲で、ほとんどが後半にのっていた。前半はリズムでかかれています楽譜や絵でかかれています楽譜が多かった。発達段階にあわせて、考えられているのだと思う。本には、たくさん鑑賞マークがついていた。しかし、日本ではクラシックを中心にCDなどで音楽鑑賞をしているが、アメリカでは歌集にのっているような短い歌を教師が歌うことで紹介しているようだ。そのためか、教師用の伴奏の本には、約130曲の歌が載っていた。ただ、全部を教えたり、聞かせたりする時間はないので、教科書の中から選んで学習しているようだ。日本の鑑賞にあたるものは、朝の放送の時間に校内放送で流していた。音楽の教師が放送を担当する曜日が決まっています、その週は確かビートルズについて話し、そのあと曲を流していたように思う。

合唱コンクールのようなものがあるか聞いてみた。コンクールはないようだが、近くの小学校、中学校、高校が集まって、音楽の交流会とか発表会のようなものが4日前にあったそう。プログラムを見せてくれた。

② 器楽指導について

この時期は、全学年に器楽の指導をしていた。といっても、日本のように楽器が演奏できるように指導する

のではなく、楽器の紹介をねらいとしているようだった。以前はハーモニカやリコーダーの指導もしていたが、日本のように一人一人が持っているわけではなく、学校で洗って貸していたようだ。衛生面の問題から、今ではしていない。

本時までに、バイオリン、フルート、クラリネット、ホルンなどの楽器の学習をひととおりし、音を聞いて何の楽器かを当てるビンゴゲームをしたそうだ。本時では、アニメのビデオを見ながら、バックの音楽を演奏している楽器を思い出すという活動をしていた。教室には机やイスはなく、カーペットが敷かれていた。その上の好きな場所にそれぞれが座り、ビデオを見ていた。教育用のビデオで、学校内のメディアセンターに頼んで購入したようだ。ときおりビデオの中でも楽器の説明をしていたが、教師と一緒にビデオを見ながら、音楽が鳴り出すと楽器のカードを子どもたちに見せていた。悪い狼が近づくところはバイオリンの音色、小鳥が飛んでいるところはピッコロの音色など、登場人物によって楽器が使い分けられているようだった。私の予想だが、もし日本で同じようなビデオがあるとすれば、もう少し楽器を紹介するという意味合いが強いものになると思うのだが、このアニメは、ストーリーだけでも十分楽しめるようなものだった。アヒルを飲みこんだ狼を、男の子と小鳥と猫で捕まえようとするが、狼の方が勝ちそうになると小人の兵隊がたくさん応援に駆けつける。小人たちが、大砲をうって狼をおどろかすと、狼は飲みこんだアヒルをもどす。そのアヒルをまた狼が食べようすると、みんなで狼を檻に入れ、ハッピーエンドで終わるといった話だった。きっと、日本の教育ビデオでは、大砲などの武器を使う、悪い事をした罰で檻に入れられて終わるといった話にはしないだろうと思う。ただ、ふつうのアニメやドラマの音楽の中にも、こういう楽器が使われているという意識づけにはなりそうだ。子どもの関心が強いアニメで器楽に関心を持たせるというのはおもしろいと思った。このビデオは、全学年に見せていたようだ。

その後、楽器について書かれている3冊の絵本を使って、もう少し詳しい説明を付け加えていた。例えば、バイオリンでは、弦や糸巻きなどそれぞれの部分の名称や、何で出来ているか、それぞれの弦は何の音がするか、演奏の仕方など、絵本の写真などに注目させながら、読み聞かせていた。演奏形態（カルテットなど）

の説明もしていた。絵本もメディアセンターに頼んで購入したそうだ。

教室内にある楽器は、アップライトのピアノだけだった。放課後、楽器の入っているロッカーと楽器庫を見せてもらった。鈴、カスタネット、トライアングル、ウッドブロック、マラカス、ギロ、カバサ、タンブリン、木琴、鉄琴、ボンゴ、シンバル、オートハープなどがあつた。小型の楽器が多く、大太鼓やティンパニなどの大型の楽器は置いてないようだった。

小学校に、鼓笛隊のようなものがあるかを聞いたが、どうもないようである。7th gradeから選択科目の中にコーラス、バンド、ドラムなど指導があり、マーチングバンドやブラスバンドのように大人数で演奏するのは9th gradeからすると話していた。

③ 評価について

通知表の音楽の評価は

O : outstanding (Super)

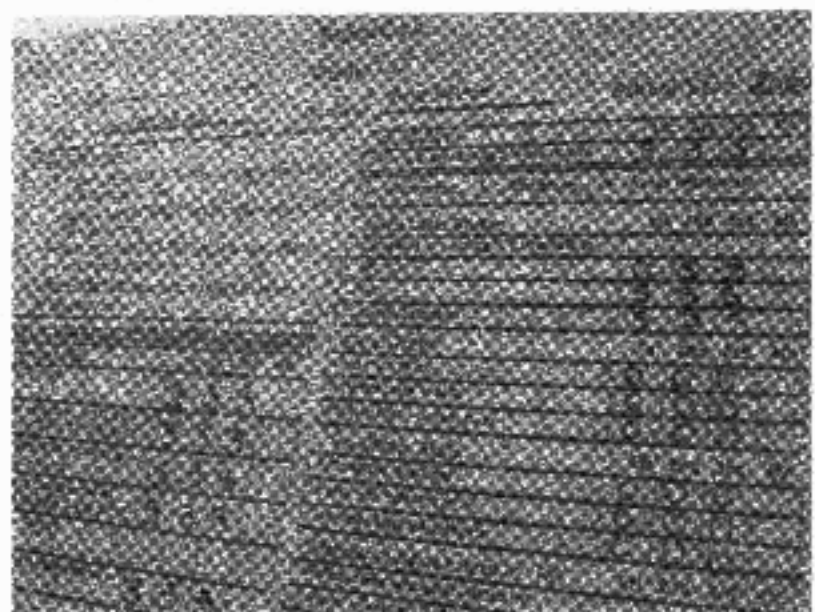
S : satisfactory (good)

N : needs improvement (not good)

U : unsatisfactory (bad)

の4段階だと話していた。歌も楽器演奏などもテストはせず、授業に取り組む姿勢や態度で評価するようだ。時間が週に1時間と限られているので、テストをする事が出来ないそうだ。

通知表を見てみると、音楽は1項目だけで、Musicとしか書かれていなかった。

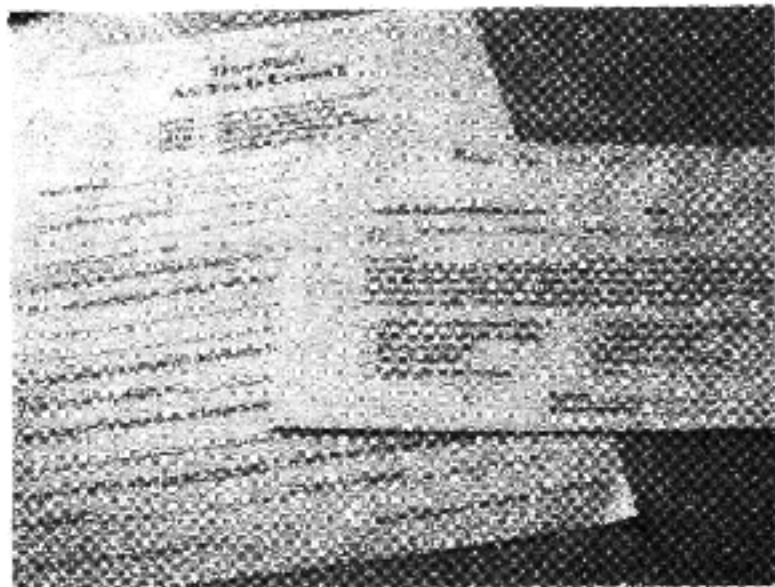


④ その他

・音楽の教師は、Mr. Mathews という27歳の男性だった。勤めて5年目だと言っていた。ノースカロライナには小学校が7, 8校あるが、男の音楽教師は1人だそうだ。別の時に聞いた話だが、アメリカでは、教師の給料が安いので、男の人はあまり教師にならな

いと聞いた。中学校、高校を入れるとおそらく男女の比率は半々ぐらいのようだ。また、学校が休みのときは給料が出ないため、教師がアルバイトをするのはめずらしくないようだ。その先生は高校にも教えに行っていると話していた。今、Beach BoysのChorusに挑戦しているそうだ。教師は、音楽の特別な免許や資格があるわけではないようだったが、その先生はピアノとギターを長く弾いていて、トロンボーンは6th gradeから12th gradeまで学校で習っていたようだ。他のほとんどの楽器は大学でひととおり勉強したそうだ。琴についても知っているらしい。指揮法やグリークラブのようなものもしたと話していた。

・ビデオを見ている途中、立ち上がった子がいた。教師が「Sit down.」と言うとすぐに座ったので「Thank you.」と言っていた。音楽の時間に、授業態度が悪い場合はどうなるのか聞いてみた。注意されてもそのままの時は、担任と保護者にVirginia Williamson Resource



Reportが渡され、授業中どのような態度や行為であったかが知らされる。一番下には、サインを求める箇所があった。子どもは担任に見せたあと、家に持ち帰り、親に見せて、またその紙を学校へ持ってくることになっているそうだ。子どもには、Think Sheet Are You In control? という紙が渡される。これは、反省文を書くための用紙で、子どもに謝罪を求めるものようだ。

(4) 今後の展望

今回は、器楽鑑賞の授業しか参観できなかったが、今後、歌唱指導についてもお互いの授業を交流し、参考にできればと思う。教科書を比べてみても、日本とは違う工夫が見られる。機会があれば、教科書をどのように使って授業をしているのかを実際に見て、そのアイデアや方法についても聞いてみたいと思った。

英語や国際理解教育の点から外国の学校と交流するという形が多いように思うが、今後、音楽交流というのも興味深い活動ができるかもしれないと考えた。教科書にお互いの国の曲がのっていることなどを糸口に、様々な交流へと発展させていけると思う。

(5) おわりに

今回、アメリカの音楽教育にふれることで、今までの日本の音楽教育を見直し、考えた事がいくつかあった。訪問した時にスイミーの音楽劇を見たが、それは、昨年参観に来られた時に、日本で見た発表をヒントにしたものだと聞いた。こういった交流によって、今後、お互いの教育実践をさらに高め合えればと思う。